

参加者による記録

2013年1月26日(土)

18:30 事前研修会・結団式

2013年のスタディ・ツアーは、羽田から夜行便を利用するため、事前研修会と団結式を空港に直結した羽田エクセルホテル東急で18時30分から行った。

事前研修会・結団式では渡邊事務局長の進行で吉井会長の挨拶、参加者全員の自己紹介後、事務局長より、アジア連帯委員会の歴史・活動概要、ラオス、タイの訪問先の説明をおこなった。その後、メンバーは、訪問先での挨拶、記録、写真の役割を決め、訪問先へのお土産等を分担し、航空券等必要書類を受け取った。



吉井会長挨拶



吉井会長とメンバーの初顔合わせ

羽田国際空港行きシャトルバスで国際線ターミナルに移動し、21:30に航空会社カウンターでチェックインした。荷物は到着地ラオス・ヴィエンチャンまでスルーカーゴで送る手続きをした。

2013年1月27日(日)

1月27日(日)に日付けが変わり、00:15にメンバーを乗せた飛行機は羽田空港を出発した。

JL033 00:15 羽田発 — 05:25 タイ・バンコク着

早朝、バンコク・スワンナプーム国際空港に到着後、バンコク・エアウェイズのラウンジでしばし休憩。その後、巨大な空港内を見学しつつ、ヴィエンチャン行きPG943便に乗り込んだ。

PG943 08:15 バンコク発 — 9:30 ヴィエンチャン着

ヴィエンチャン空港到着後、空港からわずか15分のメルキュールホテルにチェックイ

ン。軽く休憩後、ヴィエンチャンのシンボルであるタートルアン寺院や凱旋門などを視察し、コーディネーターのフンペン氏からラオスについて説明を受けた。昼食はタラートサオ・モール内のフードコートで各自、麺等を注文し、ラオスの食事が案外皆の口に合うことを発見。「これから一週間の食事が楽しみです」と口々に言い合った。

温暖化の影響なのか、乾季にも関わらず、あいにくの大雨に見舞われたが元気に探索。夜はメコン河沿いのレストランから、雨上がりの対岸(タイ)の灯りを眺めつつ、翌日からの公式訪問に備えて日程、役割分担の確認などを行った後、初めてのビアラオで乾杯した。



初めてのビアラオ

2013年1月28日(月)

09:30 ラオス地雷博物館(COPEビジターセンター)

報告：加藤 栄二

到着日が日曜日のため、実質今日がプログラム初日であり、ラオスを知るためにも避けて通れない地雷や不発弾について学ぶためラオス地雷博物館の見学をした。

ラオスは世界で最も激しい爆撃を受けた国と言われており、ベトナム戦争当時アメリカ軍により50万回以上の爆撃を受け、200万トンを超える爆弾が落とされた。

クラスター爆弾(航空機から投下されると、小型爆弾や地雷などの子弹を目標上空で散布する爆弾)の3割以上(子弹8,000万発)が不発弾や地雷として森林や田畑に残っており、子供たちが手にしたり、鉄クズの売買(現在は禁止)などで現在でも毎年100~200人の死傷者がいるとのこと。

不発弾や地雷の除去が今のペースでいっても100年以上かかるとのこと、ラオスの人々の生活や外資の誘致など、ラオスの発展にとって高いハードルとなっている。

ラオス地雷博物館では、ドキュメンタリー映画の上映やクラスター爆弾やその子弹、竹や木で作った義足など実物の展示もあり、国際協力やボランティアを学ぶ意味でも勉強になった。CSAワーキング・スタディ・ツアーの初日のプログラムとしても最適だと思った。



不発弾と未処理地図

10:30 ラオス保健省救援衣類倉庫

報告：萩原 健

ラオス首都であるヴィエンチャン市郊外にある保健省倉庫を視察した。倉庫へ行くまでの間はほとんど道路が舗装されておらず、砂埃のひどい環境だった。倉庫の中は比較的誇りも少なく、医療器具とともに救援衣類も管理されており、各方面より要請があるごとに需要に沿った形で救援衣類を送っている旨の説明を頂いた。倉庫視察の際には自分たち働く仲間が送った救援衣類を各単組発見し、あらためて自分たちの『気持ち』がしっかりと届いていることを認識した。



三菱重工労組(広島支部)の救援衣類



保健省救援衣類倉庫

12:00 ラオス保健省との昼食会

報告：田倉 正司

ラオス保健省のナオ・ブッタ官房長官が同席し、クアラオ・レストランにて保健省主催の昼食会が開催された。



ラオス保健省の前で

冒頭、CSAワーキングスタディーツアーを代表し、縄手団長よりツアーの目的や保健省管轄である救援衣類保管倉庫で救援衣類を確認したことなどを申し述べ、今後もラオスとの友好のため働く仲間からの貴重な浄財を有効に活用することを誓った。更には、日本からの博多人形の手土産とカレンダーを寄贈した。

一方、ナオ・ブッタ官房長官から歓迎の辞が述べられ、連合およびCSAからの支援が16～17年間継続されて

おり、小学校23校が建設出来たことなどの報告や、保健省に対する支援についても感謝し、衣類は国全体で村民に渡っている旨が述べられた。また、村民だけではなく病院や小学校にも救援衣類を送っており非常に感謝されている事が述べられた。ラオスにおける一家族の収入は1米ドルに満たない世帯もあり、農民は自給自足で衣類も購入できない家族も存在しており、貧困対策のためにも非常に感謝していることが述べられた。

乾杯の後、若干の質疑応答となり、出産の減少により人口増加率が2%台に減少しており、主な要因は分娩時の母体衰弱や死亡率増加が挙げられ対策が急がれるとの事であった。出生後は5%程度が1歳未満で死亡しており、マラリアや下痢が主な要因である。保健省としては国民の健康維持が最大の課題であるとの事であった。

昼食をとりながらの意見交換であったが、ツアー参加者の各人より熱心な質疑が出され有意義な意見交換が実施できた。



記念品を手渡す

13:30 ラオス教育スポーツ省訪問

報告：西巻 孝之

午前中に行われた保健省との意見交換の後、教育省庁舎に訪問した。加藤団長の挨拶の後、センデュアン副大臣から挨拶を受け、質疑、意見交換が行われた。

○センデュアン副大臣：CSA・連合の皆様、ようこそラオスへ。政府を代表して御礼申し上げます。CSA・連合の皆様には、ラオスの教育発展のため、これまでご援助をいただいている。また、サンティパーブ高校の寮生も全国の試験で優勝するなど、優秀な成績を収めている。

今後も皆様のご支援をいただきながら、私達は、これからもラオスの教育を発展させるために力を入れたい。そのためにもラオスと日本の双方で相談しながら、取り組みを進められればと思う。私たちは、これまでのCSAの業績、支援内容を整理し、政府に報告したので、政府はCSAへの感謝状、勲章等を贈る準備をしているところ。今回の訪問、視察で感じたことなどを是非教えて下さい。



センデュアン副大臣と

<質疑・意見交換>

Q ラオスの教育人口のうち、実際に教育を受けられない人の割合はどれくらいか。

A 6歳になって小学校に通っていないのは約30%程度。

現在、小学校の教育に力を入れているが、ラオス語が習得できるプレスクール（小学校入学準備校）は普及が遅れている。プレスクールに入っていない子供は、小学校に行きたいという気持ちが希薄。将来、幼稚園に行く子供が増えれば、小学校にも通いたいという子供が増えるので就学前教育に力を入れていきたい。

Q ラオスの学制はどのようになっているのか。

A 幼稚園3年、小学校5年、中学校4年、高校3年、大学4年となっている。

Q 落第の理由は何か。

A 少数民族では、共通語ができないケースがある。ラオスでは学年が上がるたびに試験を行う。

Q 落第した子供たちは何をしているのか。仕事を手伝っているのか。

A 基本的には落第しないよう、補修を行っている。

落第する子供に対しては、何が問題なのか確認し、必要なことを支援して子供たちが勉強しやすいよう支援している。また少数民族対策では、連合・CSAがおこなっているように寮をつくり学校に通いやすいようにしている。

○カムカン副局長（幼稚園、小学校担当）：CSAが小学校23校を設立したことに対して御礼を申し上げます。引き続き、小学校の建設に対し、支援をお願いしたい。

○渡邊事務局長：これまでCSAとして23校の設立をさせていただいた。しかし、2011年の震災の後、CSAに対する助成、資金が以前に対して減少している。そのような理由で今までのように1～2年で1校というのは難しい。CSAとして高校支援に対しても支援したいことが多々あるが、そこにもまだ手が届かない。しかし、連合「愛のカン

パ」の事業助成だけでなく、CSAに対し支援・協力して下さる連合構成組織や単組の支援も受けているので、今までと同様とはいかないが、コンスタントに支援を続けていきたい。また視察団の参加者は各組織を代表して参加している。ラオスの置かれている現状をそれぞれの組織で報告いただき、多くの方に伝えていただき、今後の支援につなげていきたい。

○ソフォン副局長(中・高校担当)：ラオスの中・高校支援に対して御礼申し上げる。サンティパーブ高校の寮生は、勉強に励み100%に近い大学進学率となっているので、国の発展ためには重要なことと認識している。

サンティパーブ高校卒業生では外国への留学も増えている。副大臣からの話にあったように力を入れてサンティパーブ高校と同じように人数が増えるよう教育省としても予算の問題があるが、努力したい。改めて支援に対してお礼の言葉を申し上げたい。

○加藤団長：今回、意見交換や、教育現場訪問の機会をつくっていただいたこと、改めて感謝したい。

○センデュアン副大臣：ラオスの教育のために、改めて御礼を申し上げたい。ラオスの教育が発展したのは支援のおかげです。日本の連合の皆様、将来を担う子供のための支援をしていただき、本当に感謝している。連合の皆さんが力を与えてくれたとお伝え下さい。日本で地震、津波、原発事故が起こり、大変なのはラオス国民も知ってる。一昨年、外務大臣とともに支援金を持参し、福島を訪問したが、何か私たちに協力できることがあれば教えていただきたい。

ラオスは今まで、日本のCSA・連合の皆様、支援いただいたことを忘れず、今後もラオスと日本の友好・交流が深くなるように努力したい。最後に皆さんの健康と今回の視察の成功を祈念する。日本とラオスの友好発展に向けて、お互い行動していきましょう。この後、名刺を交換し、ラオス教育省の表敬訪問、意見交換を終了した。

16:00 サンタニー地区クッサンバット村小学校(1番目校)

報告：加藤 栄二

ラオス保健省のナオ・ブッタ官房長官の招待で保健省の方々との昼食交流の後、ヴィエンチャンから約30kmの郊外に位置するクッサンバット村小学校を視察した。

到着が遅れたため、急ぎ子供達が待つ教室に入ると、放課後にもかかわらず小さな子供たちが、礼儀正しく席について待っていてくれたのには感動した。時間も遅かったため、早速子供たちとの交流プログラムを行った。



クッサンバット村小学校の教室風景

団員から子供たちへ様々な質問をすると、はにかみながらも笑顔で返事をしてくれた。

Q 好きな遊びは…? A 男の子：サッカー、女の子：ゴム飛び

Q 好きな授業は…? A 国語。

Q 理由は…? A ラオス人だから…

と答える子供たちがとても印象的だった。

また、先生に伺ったところ、

- 宿題は電気があるので家でやる(学校にはない)
- 5、6人兄弟もいるが、年々少数になる傾向
- 1日5、6時間の授業をする。試験は国語、算数、社会など5科目。
- 6月の大雨の後、田植えがあるので学校は休み、子供たちは家の手伝いや田植えをする、とのこと。

折り紙を通じた交流を楽しみ、子供たちに見送られクッサンバット村小学校を後にした。

1995年に初めてCSA1番目校として建設されたヴィエンチャン郊外のクッサンバット村小学校はかなり老朽化し、近年は特に天井と屋根が雨漏のため、また床と柱は白蟻がついたため著しい傷みが見られ、村長、校長から早急に対応を求められていたが、昨年12月に屋根の葺き替えや、天井などの改修工事が終了し教室の天井などの施設も改善されていた。

報告：萩原 健



クッサンバット村小学校

クッサンバット村小学校訪問において、団長挨拶、学校長挨拶後各クラスにて折り紙による交流会・生徒による歓迎の歌をご披露頂き交流を行った。

交流中、色々と質問をしていく中で『どの教科が好きですかと?』尋ねると生徒が皆声を揃え『国語』と答えた。

その理由を聞くと『ラオス人だから』と答えた。民族性(民族語)の強い国柄ラオス語を学ぶという事はラオス人としてあたりまえ? だから国語が好き。教えてもらえる環境にいることが幸せ。等、今の日本では中々聞くことのできない貴重な意見を目をキラキラ輝かせながら答えてくれた。また学校側からは、近況報告・課題など以下の通り意見交換を行った。

- (1) 1番目校とは、CSAによって最初に建てられた小学校のこと。
- (2) 1973年に建てられ、1995年に連合支援により新築された。
- (3) 生徒数は、49人。
- (4) 先生数は、6人(内女性2人)
- (5) 教科書が不足しているため家で勉強ができない(教科書は2人で1冊使用のため)。
- (6) 教卓を含め机がガタガタで文字が書けない。下敷きを使って対応しているが、机の老朽更新を希望している
- (7) 最近、近くに中学校が出来た。(高等学校⇒専門学校⇒村に戻ってくる人が多い)
- (8) 屋根が腐食し雨漏りがあったため昨年、改修工事を行っている



全生徒の出迎え

18:30 サンティパーブCSA高校寮卒寮生との交流

報告：並木 良枝



卒寮生のお出迎え

将来の夢を語りながらの夕食会もあつと言う間でしたが皆、自分のため、ラオスのために夢を叶えて欲しいと心から思った。学生からの心のこもったプレゼントを全員がいただいた。ありがとう！一生大切にしたい。

サンティパーブCSA高校寮卒寮生が待つ、夕食・交流場所に着いたら、全員の学生が笑顔で迎えてくれた。

皆、大変礼儀正しい素直な学生で、4月から日本の大学に留学する男の子や、日本に行きたいので、日本語学校で日本語を習得中の子や、すでに留学を終え、日本を懐かしむ女の子など、日本が大好きな子供達ばかりだった。



お別れ記念撮影

2013年1月29日(火)

10:00 在ラオス大使館

報告：駒形 文人

ラオスに入り3日目の午前中に在ラオス日本大使館を訪問した。まずは、大使館に入館する前のセキュリティーの厳重さに、日本という安全な国で平和慣れした私はやや驚きつつ、緊張感を持たされた。(カメラ、携帯電話は持ち込みすら禁止)しかし、館内に入ると日本文化の展示物や日本語を聞きくことで安心感を持つことができた。

末武団長からの挨拶を行った後に、代理大使の磯さんと二等書記官の富田さんからラオスの国内事情や日本とのこれまでの関係について丁寧にお話を伺った。その中で幾つか印象に残ったお話は、次の通りである。

日本からのラオスに対するODAは22年間世界一であり、民間からの支援国順位でも世界第5番目である。このような背景があるだろうからか、何処に行っても暖かく迎えていただいていると感じた。ラオスの学校では教科書がまだまだ不足しており、十分に勉強ができない環境があるようだ。今後、ラオスが自立していくには教育への支援が欠かせないという話だった。また、不発弾や地雷の処理が進んでいないことが、ラオスの発展の大きな妨げになっているとのこと。そのため日本政府やNGOが様々な支援をしており、不発弾処理の技術指導、被害者への支援などを中心に行っているそうだが、処理は全体のたった2%位しか進んでおらず、このままでいくと100年以上もかかるという話を聞き非常に驚いた。まだ年間で数百人の人が被害にあっているので深刻な問題



磯代理大使にお土産を手渡す末武団長

である。戦争はその時だけの被害ではなく、その後数十年に渡り暗い影を落としているのだと痛感させられた。

11:00～15:00 ヴィエンチャンからバンビエンに向け移動

15:00 ヴィエンチャン県バンビエン郡ムアンソン村小学校(18番目校)

報告：藤井 馨

在ラオス日本大使館訪問の後、約4時間をかけて(途中昼食休憩含む)陸路バンビエンに向けて移動した。当初の予定を変更してムアンソン村小学校を視察・交流した。



お土産を受け取りニッコリ

生徒が並んで出迎えの後、校長、村長、PTA会長の出迎えを受け、校長の挨拶があった。現在村民は1501人いてラオ族、モン族、中ラオ族の3民族からなっている。この学校は2007年にCSAの協力で建設され同年7月11日に引き渡し式を行った。郡の教育局長が良く管理をしていてよい運営ができています。生徒数は154人でプレスクール生19人、1年生30人、2

年生22人、3年生24人、4年生29人、5年生30人。先生は10人。

進級試験では1年生86%、2年生85%、3年生83%、4年生80%、5年生90%が合格している。群の勉強大会に出場し、約8000人の出場者中、数学でタヌーイさん10歳(女子)、国語でエンナーさん10歳(女子)が優勝した。卒業後の中学校への進学率は100%となっている。

また、経済的な理由で学校に行けない子供はいない。教科書は生徒全員分そろっているが、文房具が足りない。CSAで支援していただければお願いしたい。

近況報告の後、教室を回り、ふれあいタイムとなった。子供たちの目が澄んでいてきらきら光ったきれいな瞳が印象的だった。校庭で綱引き大会となり、まずは男子対女子の戦いで女子の圧勝となった。どこの国も女性が強い…



一緒に綱引き

…次にCSA対先生の戦いで、こちらはCSAの勝利、子供たちも加わり2回戦を行ってCSAは完敗した。

そしてお土産の贈呈式を行った。鉛筆、ノート、サッカーボール、バレーボールなどを子供達に贈った。日本で当たり前のように買い与えるものが非常に喜ばれ、何か考えるものがあった。記念撮影の後子供たちの見送りで学校を後にした。



お見送り

校長先生からの村・小学校の概要説明の後、先生及び村長を始めとする村の人々に歓迎を受けた。そ

の後、訪問団と生徒達との折り紙、更に生徒達の綱引き及び訪問団と先生チームと綱引き対抗戦を行い、交流を深めた。

2013年1月30日(水)

9:00 ヴィエンチャン県バンビエン郡タフゥア村小学校(17番目校)

報告：山岡 みゆき

バンビエンに泊まり、翌日、タフゥア村小学校(17番目校)を訪問した。

私達が到着すると小学生が両サイドに列をつくってニコニコの笑顔で出迎えてくれた。まず、職員室でシェンチャン・ボンビライ校長より「小学校をつくっていただいて、村人が大変喜んでいる。大変ありがとうございました」と挨拶を受けた後、



お土産を受け取って記念撮影

「小学校の生徒は133人で、今年13人増えた。先生は8人いる」という説明を受けた。

続いて、ピエンフォン副村長より以下のとおり報告があった。

- ・小学校に入学する前にラオス語の勉強をして、小学校で落第しないように、自分たちでプレスクールを建てた。
- ・この辺では一番良い小学校なので、大切に使っている。
- ・地区での試験大会があり、この小学校が一番だった。
- ・成績が良い生徒には、村長から鉛筆とノートをプレゼントしている。
- ・PTAががんばって、今年中に小学校の看板と塀をつくる予定。
- ・タフゥア村の人口は1,030人(女性は549人)
- ・校庭の真ん中にあった岩は、近くで工事があった時に依頼し撤去してもらった。

学校と村からの報告の後、渡邊事務局長は、「懸案事項であった校庭の大きな岩が取り除かれ、生徒のためにも嬉しい」と述べた。

下記の内容について、質疑応答があった。

- ・中学校への進学率は100%
- ・街の学校のように小学生がバスで他の地域へ社会科見学に行けない。
- ・村と学校は一緒に活動しており、村の行事に子供達も協力・参加している。
- ・生徒は一週間交代で学校の掃除をしている。
- ・教科書は政府から50%しか支給されていないので、買える親はできるだけ買ってもらうようにしている。



また来てね

最後に、校庭で、チームが持参した文房具や綱引きの綱、バレーボール、サッカーボール等の贈呈式を行った。小学生たちは、校庭でそれらを手にして、目を輝かせ嬉しそうにはしゃいでいた。

10:00~14:00 バンビエンからヴィエンチャンに向け移動

14:00 AAR Japan(難民を助ける会ヴィエンチャン事務所)

報告：加藤 栄二



AARの看板

AAR Japan 難民を助ける会(当時「インドシナの難民を助ける会」)は、1979年に相馬雪香さんが設立し、これまでアフリカやアジアなど55を超える国・地域で支援活動をしてきた団体であり、今回CSA事務局が現地での調整によりAARのヴィエンチャン事務所に訪問することが叶った。

AARヴィエンチャン事務所に到着すると、現地スタッフの岡山典靖さん、太田夢香さん、2頭のワンちゃんに迎えられたあと、ビデオを見ながら現地の状況や活動のレクチャーを受けた。

①車いすの製造と普及支援について。(2000年~2011年終了)

- ・ラオス政府と協力して車いす工場の運営を支援。
- ・工場ではスタッフとして障害者を雇用・育成。
- ・10年間で約3,000台配付。6万人に必要とされる。(国連によると人口の約10%)
※1台あたり100ドル 1人5ドル負担
- ・ヴィエンチャンでは、一部の高級ホテルや国際会議場ではスロープがあるが、市内の歩道や市場、個人の住居や道路の幅などにおいては、障害者への配慮は皆無に近い状態のため、バリアフリー普及のため多機能センターを建設しスロープ、トイレ、引き戸といった設備の見本を展示するとのこと。

②キノコ栽培のノウハウを障害者の方々へ

- ・障害者向けの小規模起業支援として、キノコ栽培とレストラン経営の研修。
- ・定職をもち、収入を得ることが困難な障害者たちにとって、小さなスペースで、少ない投資で始められ、それほど重労働を必要としないキノコ栽培は、うってつけの職業であり、月に約2,000円~3,000円の少ない収入ではあるが自分で稼ぐことが大事とのこと。

③不発弾や地雷について

- ・ベトナム戦争当時、約200万トンのクラスター爆弾(ボンビー)など188種類の爆弾のうち3割は不発弾として、今も森林や田畑に埋もれ、ある小学校では、子供が不発弾を1つ見つけたので調査すると、1ヘクタールに53個も見つかったこともあるそうだ。
- ・現在、ヴィエンチャン事務所では日本人スタッフ2名、現地スタッフ7名。シェンクアン事務所は、日本人スタッフ2名、現地スタッフ7名で運営している。
- ・主に不発弾事故時の応急処置。各村落の保健ボランティアを指導する郡病院の医師や看護師などの医療従事者を対象にした、指導者のための研修など。
- ・JMAS(日本地雷処理を支援する会)と連携。

私は、連合「愛のカンパ」の中央助成を担当しておりNPO・NGOの方々にお話をお聞きする機会が多いが、「愛のカンパ」を助成する団体の現地で働くみなさんの生の声をお聞きし、意見交換ができたことが一番の収穫だった。また、お忙しい中お時間を割いていただいたヴィエンチャン事務所のみなさまに心よりお礼申し上げます。

ルアンプラバンへ移動

20:00 QV103 ビエンチャン発(1時間半遅れ) 20:40 ルアンプラバン着

ラオス国内線の飛行機は中型機のため預ける荷物の重量に制限があり、チェックインで時間がかかった。やっとチェックインを済ますと、ビエンチャン空港から搭乗予定の飛行機は大幅に遅れており、空港内で長く待たされることとなった。その間チームメンバーは、それぞれ交流を深め合あった。

17:30出発の予定が20:00の出発となってしまったが、フライトはスムーズで、約40分でルアンプラバン空港に到着した。

2013年1月31日(木)

9:00 ルアンプラバン市内サンティパープ高校寮

報告：縄手 茉莉

サンティパープ高校寮へはホテルから近いのですぐに到着した。到着するなり、首に歓迎の花輪をかけてもらい、寮生と先生から熱烈的な歓迎を受けた。そのまま、食堂へ移動してセレモニーが行われた。

まずは寮生から歓迎の踊りを披露され、その後、校長先生から挨拶。その中で、優秀な生徒を選抜する全国大会があり数名の寮生が優勝したこと、寮生たちも勉強に励んでいることや、日本からの支援について非常に感謝していることなど説明を受けた。また、寮生は日本からの支援に答えるべく勉強をとて頑張っているとのことだった。

続いて、萩原団長の挨拶の後、救援衣類を渡すと生徒たちがとても喜んでいて笑顔が印象的だった。



萩原団長の挨拶



パーシーで歓迎

セレモニーの最後にはパーシーと呼ばれる儀式を行った。生徒たちがワーキング・スタディ・ツアーメンバーへの歓迎と健康を祈りながら手首に紐を結んでいくもので、終わるころにはメンバー全員、両手首にたくさんの紐が結ばれた。全員とても感動してしまいました。

その後は再び、寮生からラオスの踊りの披露があった。私たちは見ているだけかと思っていたら……いきなりワーキング・スタディ・ツアーのメンバーの名前が呼ばれ、一緒に踊ることになった。普段、踊ることがない私たちは少し(かなり?) 照れつつ、見よう見真似で生徒たちと一緒に踊った。最初はモジモジしていたメンバーも5曲目に入るころにはみんなノリノリ! 言葉はほとんど通じませんが、一気に生徒との距離が近づいたように思った。

セレモニー終了後、寮の見学に向かった。現在、寮では80人(1年生20人、2年生30人、3年生30人)の寮生が暮らしており、男性メンバーは男性寮、女性メンバーは女子

寮の見学をした。

女子寮に入ると…部屋がかわいい…！ポスターが貼っていたり、ぬいぐるみが置いてあったり、そして教科書はきちり整理され……とても女の子らしい部屋だった。部屋は決して広くなかったが、狭い中でも一生懸命勉強している様子を感じることができた。

ルアンプラバンからバンコクへ移動

16:30 PG946 ルアンプラバン国際空港発(20分遅れ) 18:30タイ国際空港着

ルアンプラバン空港から搭乗する飛行機は中型機のため、空港カウンターでは、多くのメンバーが「荷物が重すぎるので、できるだけ手荷物にするように」注意を受け、荷物をつくり直すことになった。スーツケースの重さは規定で20キロのまでのようだが、受付の人によっては、1～2キロは誤差の範囲のようだった。

出発時間は少し遅れたもののフライトはスムーズで、タイのバンコクの郊外にあるスワンブーム国際空港に到着した。入国手続きも比較的スムーズで、いつも混雑している同空港の入国手続きとしては非常にラッキーでした。

明るく華やかな夜のバンコクの街並みを久しぶりに目にしつつホテルにチェックイン。その後、シンハーなどタイビールとタイしゃぶしゃぶでバンコクに無事に着いたことをチーム全員で喜びあった。



ルアンプラバン空港で

2013年2月1日(金)

9:30 タイ社会開発福祉省表敬訪問

報告：末武 研一郎

ツアー最終日、タイ社会開発福祉省表敬訪問し、倉庫を視察した。

ビデオによる2012年度CSA救援衣類活動の様子が紹介され、昨年6,400箱(80t)、810万パーツ(2,100万円)相当の救援衣類が日本より贈与されたと報告があった。その後、参加者全員の自己紹介の後、駒形団長から副大臣に救援衣類が引き渡された。

○パコーン副大臣からの挨拶：タイ国民に対する日本からの支援に感謝申し上げる。中古衣類は貧困で苦しむ人々にとっても役立っており、直ちに配布を行っていく。

タイと日本は距離は離れているが、お互いに協力し、助け合いながら今後も活動を支援していきたい。先ずはタイ国民を代表して、CSAの皆さんに来て頂いたことに感謝を申し上げます。



救援衣類贈呈式

11:00～ タイ社会開発福祉省倉庫(救援衣類保管倉庫)

報告：縄手 茉莉

社会開発福祉省が管理する救援衣類保管倉庫を訪問し、CSAから送った救援衣類を確認した。山積みになったダンボール箱の中からみんな自分の組織が送った箱を探し出して写真を撮った。

救援衣類のダンボールは倉庫で開封され、男女・大人・子供といった内容別に仕分けされ、保管された後、各地域に送られていると説明を受けた。現在は4人で仕分け作業を行っていたが、仕分けする人手も不足しているとのことだった。



倉庫内で話を聞くメンバー



衣類仕分け担当者と一緒に

救援衣類でどのようなものが不足しているか聞いたところ、子供服がかなり不足しているようでした。また、地方の子供たちには、ぬいぐるみなどがとても喜ばれるとのことでした。他にもタイ北部では長袖の冬服がちょうどよいため、セーターやトレーナーなどがとても助かっているという話もあった。

13:30 在タイ日本大使館表敬訪問

報告：田倉 正司

伊藤書記官(電力総連・東北電力労組出身)に対応して頂いた。伊藤書記官は、初代書記官の高木氏(元連合会長)より11代目となる。連合から7つの国の大使館へ派遣しており3年任期となっている。日本からの大使館派遣国はタイが最初であるとの報告を受けた。

冒頭、伊藤書記官よりタイの国内情勢について報告があり、人口6,339万人で日本の半分、面積51.4万平方キロで日本の1.5倍、民族はタイ族・華僑・マレー、宗教は仏教が94%・イスラム教が5%、言語はタイ語、治安状況などの報告と共に、経済動向や日本とタイとの貿易関係および経済関係などについて報告を受けた。特に、2011年に発生した大洪水の被害に対しては、内需が盛んであり、早期の復活が実ったとの事であった。タイ政府



大使館前で記念撮影

による減税対策も労働集約型(地域)に対する減税よりも、高付加価値産業への減税にシフトしている事等が述べられた。更には、自動車に対するシェアは、1位がトヨタであり2位はピックアップトラックの影響もあり、いすゞが確保しているとの事であった。

その後質疑応答に入り、経済問題や労働問題ならびに現地の状況などについて意見交換を行った。特に、貿易相手国である日本および中国については、親日的でもあり、尚かつ中国に対しても友好的であることが述べられ、労使紛争についても、拡大する前に相互の努力で解決できているとの事であった。

労働組合出身の書記官であり、連合からの派遣者でもあるため、多種に亘る部分で共有でき、和やかな雰囲気での意見交換となった。

18:00～ お別れ夕食会

帰国前の最後の日となる夕方は連合主催による「お別れ夕食会」をチェラロンコン大学付近のショッピングセンター内のレストランで開催した。チームのメンバーは、一週間の工程を無事終えることができる安堵感や共通できた体験や感動についての思い出話に花を咲かせるとともに帰国後の再会を約束する等、楽しい時間を過ごした。そして、全員でチームメンバーの無事と帰国まであと一歩となった達成感などをかみしめ合った。

23:15 バンコク発

2013年2月2日(土)

07:05 成田空港着

全員無事に入国審査を済ませ、渡邊事務局長の解団宣言後、お疲れ様を言い合い、それぞれ帰路に着いた。(皆様、大変お疲れ様でした)



タイ社会開発福祉省前で記念撮影